令和５年度第１回尾道市総合教育会議会議録

日　　時　　令和５年１２月２１日（木）　午後１時１５分　開議
場　　所　　尾道市役所４階委員会室
署名委員　　宮本教育長

午後１時15分　開会

○末國庶務課長　定刻になりましたので、ただいまから令和５年度第１回尾道市総合教育会議を開会いたします。

初めに、本会議の主催者であります平谷市長から挨拶をお願いいたします。

○平谷市長　それでは、皆さんこんにちは。

大変お忙しいところをお集まりいただきまして大変ありがとうございます。総合教育会議ということで、市長部局と教育委員会がいろんな意見交流をしながら教育施策に取り組んでいこうということで、市長は主催ということで、私が司会をさせていただきながら、同じ認識の上に立って取り組みたいというようなところで会の運営をさせていただきます。

今は、全国が一つの課題の中で、東京を中心としたまちづくりと東京以外、どちらかというと皆東京のほうへ人を集めていくスタイルになっています。それはもう東北のほうは、もっと激しいのは、宮城県の仙台には人がいるけど青森、秋田、新潟、そのあたりは非常に厳しい状況になっていると。

もう一つは、開発が、昨日もちょっとハーバード大学の教授が来ていろいろ話をされる中に、圧倒的な資金力で開発をしています。今、麻布台に麻布台ヒルズというのをやるのですけど、それは恐らく森トラストが、縁があって森トラストの常務と話ができるのでいろいろ話をするのですけど、２ヘクタール、３ヘクタールの開発を一気にやるのです。六本木ヒルズぐらいの広さをやったときに、今のように大きな広さをやって、その整備をするのに15年かかった。できて20年ということで、コンパクトシティーを１つつくるので、そんな感じでどうもやってくるので、かかっている金額は多分もうこの辺り想像を絶するような5,000億円とか6,000億円の事業です。それを東京は至るところで開発を図っていっているので、恐らく今広島の駅前の開発とかといっても、本当にローカルの開発ぐらいの、東京の感覚はそうなのです。

だから、子供たちが都市化したところに向かって、大学も含めて流れて、そこから先と言うと、安定した企業というので人の就職の流れがそっちまでいっ

てしまっているので、東京一極集中の流れを地方は全部受けていて、だから優秀な子供をつくると、秋田なんかは成績優秀だと言われても、もうそれは地方を疲弊させる学力だと。だから、学力が高くて良い良いと言われていても、それは地域を活性化する学力でないというのが秋田の人。

それぐらい今のように固まった形で東京都の塊ができてきているというような状況で、それを何とか東京オリンピックの後に関西をもう一つの中核としようということで大阪関西万博ということが動いてるのですけど、それが今の資材高騰等の話の中で事業がどうなると議論されている。でも、核になるというのは、日本全国の状況の中に東京都とか大阪とか、九州の福岡を中心とした展開をされている。

その中で、少子化という問題と高齢化の問題が今の議論をされていると。今のを尾道的に考えれば、広島県の中で広島市は人口120万ということで、その周辺がいわゆる衛星都市ということで、広島市の恩恵を受けながら今のように人口を維持したりと。少し外れると非常に厳しいと。

一方、こちらの今のように県東部という話になると、尾道単独でというようにいうのは、働く企業も含めてやっぱり福山を中心とした備後連携中枢ということで80万の人口を維持していくというのが非常に大きな課題だろうというようなところだと思います。四国４県合わせても、日々厳しい状況になってきていると。10年間ベースで60万人ぐらい人口が減っているというのが四国の状況という。

その中で、そのまちづくりという話の中で、どのようなそういった周辺の課題を持ち寄る中で、尾道が住んでよかったと、あるいは訪れたい、あるいはそういった課題を背負いながら今の市の行政と、それから今の教育行政を展開するということだと思います。

よく尾道大学とかテーマで言われて、地元就職がどうのこうのって数字を議論されるのですけど、来てる子供たちが就職したいと思う企業がどこに多いのかというような話で結論が出てるというような話なので、そういう意味で言うと地方都市は非常に厳しい。それは雇用の環境も含めてという状況があるという中で、どのような形で少子・高齢化に対応していくかということだというふうに思っています。

その中で、尾道は今の皆さん方のそれぞれの取組によって、今はそういった伝統的な産業も含めて、企業も含めて尾道色の独自の線をしながら頑張っていただいているというような状況だと思いますけど、押しなべて住み続けたいと、住んでいる人たちがこの町を誇りに思うとか、いい町と思うということの

意識をどのように持っていくかということと、この町のいわゆる教育環境で学ばせたいというように思っていただくかとか、あるいは訪れたいと思っていただくかという、地元のいろんな意味で教育に関してもまちづくりに関してもファンづくりをしていくということが大切なことだと思っています。

一方、そういう意味で１月５日から、ぽんのみちというアニメが尾道を舞台に展開されるのですけど、もともと講談社がオリジナルで原作でやるアニメなんですけど、若い女性とマージャンはアニメ化すると決めていたと。でも、どこの場所でするかというのは決まってなかったと。それで、なぜ尾道になったのかというと、尾道のことを悪く言う人がいない、いいまちだいいまちだとしか言わなくて、尾道はね何とかというそんなことは聞いたことがない。だから、尾道がいいまちだということで尾道を選びましたというのを言っていただいて、やっぱりいろんな形でファンをつくる。それぞれの分野でというのは大切なことだなと。

もう一つは、尾道はいろいろな意味で評されて、寺のまちとか絵のまちとか言われるんですけど、教育のまち尾道って言われてないよね、教育のまち尾道って言われたいよねという。それで、毎朝歩いてて、６時45分から50分ぐらいに尾道高校のグラウンドに散歩の途中で寄るのですけど、そうすると選ばれてきている、尾道高校のラグビー部で学ばせたいと思ってきているので、いやすごいなと思うのは、東京の八王子から中学生がブリカンズのファンだというので、ここでラグビーをやりたいということで両親と一緒に来ていて、両親がグラウンドの外へおられるので、そこで監督が尾道の市長だというてから話になって、あれこれ話をすると、もう今日子供はブリカンズと一緒に練習してるだけで感激してると思いますと。ほんで、両親は八王子から尾道へ移住してくる。奥さんは保育士と看護師の資格を持っているから私は就職できます、お父さんは尾道だったら人が今のいろんな事業で不足しているので、尾道で働きますと。

一つのスポーツのことでも、やっぱり選ばれてこられるようなものが、例えばラグビーの話だけじゃなくて学校のそれぞれの高等学校だったり小学校も中学校も、親も行かせてよかったとか、そういうようなのが尾道のまちづくりと教育が連動しているというように思っていて、今のように大学もＴｉｋＴｏｋなんかで偏差値35のＦランク大学というてバッと出るよね。その大学なんかの話も、もうこれから少子化の中で、市立の地方大学というのはどうなっていくんかというていうのをあおっているような感じになるんだけど、やっぱり選ばれてき続けるような大学も要るし、それから小学校も要るし、逆に就学前だっ

て要るという、その辺りをいかにしてまちづくりとして展開するかという課題は意識を持っているので、そんなところは非常に教育というのは選ばれてくるのは大切だと思うし、逆に尾道高校のラグビー部でも、多くはもう市外です。それが大学へ行く、それから就職していく、それで尾道のことは思い出になってよかったと外で発信してくれる、それも非常に大きな効果だと思うので、高校を出て卒業して大学へ行って就職してもふるさとのことを18年間、この間、たなかりかちゃんがジャズでコンサートしてきても、尾道で生活した18年以上、もう神戸で生活してるのだけど、やっぱり尾道弁になるとか、帰ってきて凱旋コンサートしてくれるとか、ああいうやっぱり暮らしたことによってもいいイメージを持ってもらうと。そんな感じがまちづくりと教育は同じ方向に向いたまちづくりだなというように思っています。

そんな意味で、また今日はいろいろお話をさせていただきながら、意見もいただきながら方向性を見つけていけたらなというように思っています。今はちょうど少子化ということの中で、先ほどもお話ししたように、県立高校の在り方についても大きな流れができているような状況がありますから、様々な形で過渡期だと思いますけど、皆さん方と今日会議でいろいろお話をさせていただいて、情報交換させていただいたらと思います。

最近は、やたらと何か批判とかそういったことだけが多く出て、コメンテーターする人がいるけど、やっぱり褒められたいですよね。尾道がやってきた、この間も、今日も先ほど話をしたように、八天堂の森光会長が尾道のみなと祭りが羨ましくてたまらないと。ほんで、片っ方は福山の福通の小丸さんが平山郁夫美術館が物すごく、それから今のようにＡｚｕｍｉというすばらしい旅館がある、あんな旅館は福山にはない。それから、リトグラフを平山郁夫美術館で200万円とか300万円のを売っている美術館は平山しかないと。それを買いに来る人がいるというのがまた尾道の瀬戸田のすごさだよと。福山はいろいろな美術館があるけど、200万円、300万円売っているところはない。目線を変えてみたら、圓鍔勝三さんの文化勲章の美術館も含めて、今のように平山さん、２つの術館があるというのもそれも財産だと思うし、よく考えてみたらもっともっと自慢してもよくて、褒められてもいいことがたくさんあるなと思うところの中に、暮らしているので日常になり過ぎて分からないところもあるかも分からないけど、そんなことを話をさせていただきながら、今日会議を進めたいと思いますので、今日はよろしくお願いします。

○末國庶務課長　それでは、議事に入ります。

尾道市総合教育会議運営要綱第３条に基づき、これより市長が議事進行を行

います。

○平谷市長　ほいじゃあ、本日の会議録署名人は宮本教育長さんを指名いたしますので、よろしくお願いします。

今日は議題が２つということで、１つは部活動の地域移行を求められているので、これはもともと部活動の地域移行というて背景はいろいろ少子化の話とかである中で、スポーツ庁の方向性ということで肝になる内容だということで、宮本教育長も御存じだと思う、角田君というてもともと県の教育委員会へ勤めてた文部省出身の方がスポーツ庁の次長じゃったんです。それで、部活動の地域移行というのは、スポーツ庁から進めていく一丁目一番地なんですよという話はしてたんじゃけど、基本的に財源とかも何もない中で方向性だけいったまま今動いてるという状況なので、部活動の地域移行というたらスポーツ庁だけじゃなくて、もちろん文化庁も含めてスポーツ活動以外のところもあるので、社会構造を変えていく意味では物すごく大きい動きなんですけど、一遍にはなかなかそこまでいかないので、どんな状況ですかというていうことを今のような話をさせていただきながらということと。

それからもう一つは、学校教育の在り方ということで、健康で元気な子供の育つ環境づくりという話の中に、最近の子供さんの中に朝御飯をきちっと食べてる子供ばっかりじゃないという状況ですよね。朝御飯を食べてない子供たちがいる。そんな話で、やっぱり健康づくりという話になると、元気な子供たちが育っていく環境づくりはどうだろうかということで、学校教育の在り方なんですけど、健康で元気な子供が育つ環境づくりということで、２つの議題をテーマとして話をさせていただいたらと思ってます。

全国大会とかへ行ったりする子供が表敬で来たときに、朝御飯はパンか御飯かというて聞くんです。そうすると、パンの子が意外に多いんです、朝食が。ほんで、御飯を食べてて御飯とみそ汁というて、みそ汁はなくて御飯とスクランブルエッグとウインナーという。普通、御飯でみそ汁に何とかよというんじゃなくて、今の子供たちが家庭で育って食べてるその御飯というのは、多分昔の、豊田先生、私らの時代とちょっと違うかも分からんので、ほんでそういう感覚も含めると、「早寝早起き朝ごはん」という３つぐらいのテーマみたいなのが要るんじゃないかとか、それから今のように尾道高校のラグビー部を見よっても、骨折するという話になってカルシウムが不足してるかも分からんからとかというて、そんな話を今日村上さん、話をしていただきゃあいいと思うんで、その辺のところでどのような形で行政としても考えていけば、もちろんそれは就学前の給食なんかもそうだろうと思うんで、そんなところで皆さん方も

意見交換ができたらというように思います。

ほいじゃあ、教育指導課長さんが説明をするというて、資料を準備するんで、お願いします。

○石本教育指導課長　それでは、学校教育の在り方、健康で元気な子供が育つ環境づくりということで、資料に沿って教育指導課から御説明いたします。

資料の１枚目は、内容について書いてあるレジュメになっております。

１枚目をめくっていただきまして、タイトルを載せさせていただいております。

では、その次の資料のほうから説明をいたします。

それではまず、健康で元気な子供のためにです。

こちらは、全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙において、朝食を毎日食べていますかという問いに対する肯定的評価の推移を示したグラフです。なお、令和２年は、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となっております。小学校では94％前後、中学校では92％前後の児童・生徒が毎日食べていると回答しています。

現在の主な食育の取組としましては、各学校での掲示や昼食時間の放送、給食だよりや食だよりなどによる啓発、また栄養３・３運動、つまり朝、昼、夕の３食をしっかり食べることと３色食品群のそろった食事を取るよう勧める取組などを実施しています。

３色食品群とは、食品を赤色の食品、お肉や魚、卵、大豆、牛乳など、それから黄色の食品、御飯、パン、芋、砂糖、油などのこと、また緑色の食品、野菜や海藻、果物などの３つに分類したものを指しております。

続いて、心の栄養としての読書活動の推進にも力を入れております。

次のページを御覧ください。

昨年度、学校図書館において、冊数はありますが活用されていない本がある、開架する場所が足りないため一部は別の場所に保存するのみになっている、また手に取りやすく活用しやすいレイアウトにしたいが場所がないなどの課題が見えてきました。

そこで、今年度は方向性として開架場所を確保し、手に取りやすいレイアウトにするとともに、活用しやすい図書館とするため、計画的に廃棄を進めていくこととしております。

夏季休業中に全教職員で廃棄をする本を検討した学校もあり、また図書委員会を活用して生徒目線で廃棄対象の本を選別した学校もあります。このようにすることで、図書室を子供たちが本を取りやすい環境にするように今取組を進

めているところです。

続けて、次のページです。

次に、環境づくりについてです。

大切にしたいのは、自分を大切にできる、ほかの人も、友達とかも大切にできる環境づくりです。

こちらは、全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙において、自分にはよいところがあると思いますかという問いに対する肯定的評価の推移を示したグラフです。年によって変動があるのですが、小学校では上昇傾向、一方中学校では若干の下降の傾向もあります。

自分を大切にするためには、自己肯定感を向上させることが必要であると考えます。例えば、久保小学校では、現在教育活動の中に褒めるという活動を取り入れることにより、自己肯定感を高める取組を行っています。

また、他の人も大切にするためには、絆づくりが大切であると考えています。これには、ここ数年縮小傾向にあった学校行事や特別活動の活性化が大切です。例えば、栗原北小学校ではクラス会議という取組によって共同体感覚を気づくような取組を進められています。

さらに、自己肯定感を高め絆をつくる取組として、教育委員会では芸術祭、音楽コンクールや小学校の音楽祭、中学校リーダー研修会などの開催を行っております。

では、次のページに行きます。

自分を大切に、また、ほかの人も大切にできるためには、集団が安全・安心な場になる必要があります。授業では、学び合いや教え合いによる協働的な学びも求められます。例えば、向東小・中学校ではこのようなキーワード、むかいひがしたいわ、これらをキーワードに授業の中で深い学びを目指しているところです。

続けて、次のページに移ります。

こちらは、不登校についてです。

全国的にも不登校児童・生徒数の増加は課題となっており、本市においても喫緊の課題となっております。今年度も、昨年度同時期よりも多い人数で推移しています。主な要因は、無気力、情緒的不安が上がっている状況でございますが、不登校に至る要因は複雑で多岐にわたっております。昨年度、令和４年度の不登校の報告を基に、さらに項目を集め要因分析を行ってみました。

次のページを御覧ください。

こちらは、小学校１年生の項目を拾ったものです。テキストマイニングとい

うソフトを使い、多い項目については文字が大きくなるような表示になっております。小学校１年生では、不適応という文字が目立っております。

続いて、次の２年生の状況です。こちらは、学業不振、勉強のことについての項目が目立ちました。

続いてのページです。

３年生です。３年生も不適応という文字が大きくなっております。

４年生を御覧ください。４年生もこのような状況になっております。

続いて、５年生です。５年生になりますと、学業のことについて文字が大きくなっております。

６年生です。６年生も、今度は要因がたくさん増えてきている状況が見えてきます。

続けて、中学校です。

中学校１年生は、不適応という文字が大きくなったり、学業ということも大きな文字になっております。

続けて、中学２年生です。

最後に、中学３年生を御覧ください。学業のこと、また不適応のこと、様々な要因が多く見られております。

このように、９年間を通してみますと、学業の不振あるいは不適応に関する文字が大きな要因として見えてきました。不適応というのは、何らかの要因で学級集団などに対応できず不登校に至っているという状況と捉えています。

ここからは今後の方向性ですが、不登校としての対策としては、やはり学力の向上、授業づくりの工夫、また集団づくりということに力を入れていきたいと考えております。各学校では、具体的にどのようなことができるのか、一緒に考えていきたい、取り組んでいきたいと進めているところでございます。

報告は以上です。

○平谷市長　ありがとうございました。

それでは、皆さんのほうからそれぞれ初めの健康で元気な子供のためにというんで、朝食を毎日食べてますか、５％、小学校では逆に食べてない子がいる。中学校では８％食べてない子がいるという。どうでしょうか。

豊田先生。

○豊田委員　私もちょっとこの表を見せていただいたときに、朝食を食べているというのが九十何％ですから多かったんですけど、毎日食べていないという５％ないしは８％、そのあたりの子供たちの実態、そういうものをきちんと捉えて、各学校でどうしてそういうふうになっているのかというところを調べる

というよりか、知って指導することが要るんじゃないんかなということを思いました。

そこらはこれから調査か何かされるんですか、もうしておられますか。食べてきている子はいいと思うんですけど、食べてない子供たちの生活の背景とか、そういうところをしっかり見詰めていくことが大事なんじゃないんかなと思うんですけれども。

○石本教育指導課長　各学校では、そのような実態も捉えていると思います。これにつきましては、やはり家庭との連携でありますとか、様々な機関との連携とかということもあろうかと思います。先ほど少し紹介しましたが、やはり体、成長のことについて、食ということを通して３食運動ということなども啓発、お知らせをするというようなことも行っている状況です。また、個々にも対応をしていけるところもあるのではないかと思います。

○平谷市長　対応で、尾道は第３の居場所というので３か所で取組をしてるんですけど、とりわけ今の一番最初に開いた居場所で取組をさせていただいてるその来てる子供たちは、もちろん家庭の状況もあったり、食事の問題の不安定な状況もあったりして、それを改善することによって、今のように家に帰らずに、学校が終わったらそこに行って愛情を持った、あるいは食事とかもできたりするような話になって、生活環境も変わってくるんです。

だから、学校のその朝食を食べないというのがいろいろあるんだろうと思うんですけど、そこのところが多分子供たちにとったら非常に大きいことかなと。第３の居場所なんかでもそう思いますよね。家庭がやっぱりそういったことが大切だと思っとっても、なかなか家ではできない状況があったりとか、そこのポイントが非常に大きいなというふうには思います。

○村上正則委員　先ほど市長さんが言われたように、家庭の教育が一番だと思います。というのが、これ文科省のデータなんですけども、欠食する児童・生徒の欠食の理由が、食べる時間がないというのが36％ほど、食欲がないのが32％、だから食べてない子のその中の理由がそのような感じだと思います。そういう子は大体、遅寝遅起きでテレビとかゲームをよくやると、毎日食事を食べてる子より比較的そちらのほうの比率が高いというのと、親の意識の中で、子供の生活習慣づくりの意識がやっぱり食べてない子の親のほうが若干低い、比較的意識が高いというのは、食べてる子の親は38.7％がそういう生活習慣づくりに意識があると。食べてない子の親は30.9％なんで、やっぱり家庭のほうにも深くアプローチしていかないといけないのかなと。

そこで、ちょっと１点。栄養教諭がいると思うんですけども、例えば保護者

に対してそういう講演会というか、そのような活動はどうなってますか。もし分かればで結構です。

○石本教育指導課長　栄養教諭につきましては、市内で８名配置をされているところです。それぞれ学校へ訪問して、授業の中で栄養のことについて、食事のことについてとか食に関する指導を子供たちに行っているところです。

保護者ということにつきますと、やはり学校を通して学校の活動の中でということもあろうかと思いますので、その栄養教諭の資料等を使ってということもあるのではないかと思いますが、各学校で食育の計画を立てておりますので、その中で家庭との連携ということも立てられて行っていることと思います。

また、献立表なども家庭のほうに配布させていただいたり、食だよりということについても毎月いろいろな情報を入れて御家庭のほうにお伝えもしているところですので、そのあたりで連携が取らせていただけているのではないかと思っています。

以上です。

○平谷市長　今どんなん、手え合わせて家でいただきますって言よんだろうか。

○宮本教育長　全部が全部言ってないでしょうね。

○村上正則委員　一緒に食べてるかどうかがまた。

○平谷市長　給食のときはみんなで。

○宮本教育長　給食のときはみんなで、日直さんが前に出て挨拶するんですけど、家の場合はある資料を読むと家族と一緒に食事をしているかどうかっていうデータからすると、一人で食べてるお子さんとかがいるんです。そうすると、もう何か一人でこれをしてるかというと怪しいというか、してないんじゃないかなという気がするんです。

家族でみんなそろって朝食を食べるとか夕食を食べるっていうのが、社会の変化か仕事の関係か分かりませんけど、少なくなってるんだなというのをすごく危惧します。

○平谷市長　恐らく、今はゲームをやってるのが多いので、ゲームをここへこう置いて、やりながら何か食べたり、そういう最近の子はいるんじゃないかなという気がするんで、食事の仕方もやっぱり少しあるかも分からんよね。

今のように、家族みんなでというていうたら、仕事の関係もあったりするというのもあるじゃろうし、その辺はこれから少しどうするかというのは、どうでしょう。

○奥田委員　ゲームをし過ぎていろいろ生活が乱れるというのは聞きますけど、

そういうことの弊害をはっきり早いうちから、小学生の早いうちからそれは体に、将来にとってよくないんだということを教育をしっかり学校でしていく、それを予防するような形で粘り強く指導していくということをやらないといけないと思うんです。都会型であればそういうふうに放任になってるけど、市長さんが言われたように、尾道の教育といわれるような、全国に誇れるような尾道の教育をつくるためにはいろんな要素があると思うんですけど、そういう何か子供の成長にとってこれをやるべきだという、そしてそれを徹底してやると。理念とか言いっ放しじゃなくて、これを大切なことはとことんそれを徹底してそういう子供を育てましょうという、そういう視点が必要なんじゃないかと思うんです。

やっぱり朝食べる、食べないとおかしいと思うような子供を育てないといけないし、ゲームにしても、よく家庭でいっとき問題になったときに、家庭内でゲームをする時間を何時まではいいけど何時からはもう制限しましょうというような取組をしましょうという話もあったと思うんです。それが今どうなってるのか。家庭内でそういうルールをつくって、ゲームをするんでも９時までとか、やっぱりそれを学校全体で後押しをして、そういう雰囲気をつくっていくことによって、この朝食の問題もいろいろ体調不良の問題もかなり解決されると思うんで、そこら辺の基礎的な生活環境づくりをしっかり学校がとことん丁寧に見てやっていく、家庭と一緒になってやっていくという、そういうもんもやっぱり必要じゃないかなと思いますけど。

○豊田委員　今奥田先生がおっしゃいましたが、学校での給食ですよね、給食の指導とか、それから私も勤めていた当時、栄養士の先生が非常に熱心な方が一緒になったんですけれども、ランチルームというのを月に１回計画して、全部の学級１回は、月に、ランチルームへ集めて、そこで栄養指導とか、それから季節に応じた日本人の食べ物の指導とか、それから戦時中のだんご汁ですか、そういったものも体験させたいんだということで、もう本当にいろいろに指導のメニューを作って指導してくださったんです。子供たちもとっても楽しみにしてランチルームへ行っていましたけれども、そういう学校での取組も、今そういうことが行われているかどうか分かりませんけれども、コロナがありましたから、これから後はそういう学校の役割とか、それからその方は非常に熱心な方で、栄養だよりのようなのを出して、保護者の方に学校ではこういうふうな指導をしてますよ、だからおうちでもこんなものを作って食べさせてくださいとか、そういうお手紙、お便りといいますか、そういうものも出しておられたし、学校全体でそれを取り組もうということでやったことがあるんですけれ

ども、やっぱり継続してそういうことをやっていく、家庭と連携してやっていく、そういうことが要るんじゃないんかなと。今でもしておられるかとも思うんですけれども、役割に応じた指導というんですか、それも必要じゃないかなというふうに思います。

○村上正則委員　やはり、子供で欠食することが多い子供の親は毎食食べてるというのが61％なんです。毎日朝御飯を食べてる子供の親は91％朝御飯を食べてる。だから、親が朝食べてないのに子供だけ食べなさいといってもなかなか難しいので、まずは家庭から何とかしないといけないかなとは思うんです。意識づけをしていかないと、なかなかこの問題は学校だけの対応では難しいことになるんじゃないかなと思います。今の資料は、文科省の平成30年度の家庭教育総合推進に関する調査研究という資料です。

○平谷市長　とかく勉強のことは、宿題があって何とかじゃというのがよう言うんじゃけど、本質的に子供を元気にとかという話になると、やっぱり食の部分がもう片っ方大切なことだと思うんで、それは多分孫がおったりしたらスマホとかでこうやってしたりしょうるやろ。そう見たりすると、逆に言うと食事のときでも何かを気にして何とかしたりとかそんな状況になってるようなとこがあるけえ、食卓の文化みたいなのが、時代が変わってきていろいろあるように思うんだけど、やっぱり大切にするところはそこが一つやっぱりテーマとしてみんなでやったほうがええかも分からんね。それは学校だけじゃなくて、やっぱりお父さんやお母さんもおじいちゃんやおばあちゃんもそうよみたいな雰囲気づくりみたいなんが要るか変わらんよね。

○村上節子委員　今の保護者との連携っていうのでいうと、過去に子供が行ってた小学校で役員をさせてもらってたんですけど、学校に子供が２人いるので約９年間ずっと通ってたんです。９年間ずっと、毎年６月の参観日には給食試食会というものをしますと。給食試食会があった後に参観しますという流れがあって、その給食試食会っていうのはＰＴＡが主催でやるような形だったんです。そのときに、子供たちが食べる給食に合わせて栄養指導の先生とかにいろいろ御指導いただいたりとかするという場面があったんですけど、今の保護者、家庭での食育を協力を求めるっていうのであれば、まずＰＴＡにしっかり働きかけるっていうのが大きいのかなと。

　そのスマホの使い方にしてもそうですけど、過去にそれは市Ｐ連のほうでまた役をさせてもらってたときに問題になってて、その問題提起を講演会とか何度かさせてもらって、市Ｐ連のほうからも発信するという形を取ってたので、市Ｐ連のほうに今こういった課題があるということもしっかり伝えてもらっ

て、ＰＴＡからも保護者に発信する、市のほうからも発信するという両方から発信したらいいのかなっていうのを思いました。

あと、栄養士さんなんですけど、私が読んでる本の中では、栄養のバランスっていうものが今この日本の国内で言われてる栄養のバランスでは足りないと。特に、今の子供たちには鉄分が足りないっていうのを言われてて、昔は例えば鉄のフライパンとか、お湯を沸かすのでも鉄瓶で沸かしてたりとかして勝手に入ってきてたものが、今はフッ素加工のフライパンになったりステンレスのやかんになったりすることで鉄が不足してる。その鉄が不足することによって、朝起きにくい体、いわゆる起立性障害になっているということが書かれてたんです。

うちが、私自身が健康維持したいなと思ってサプリメントを今その本を読んで取り始めてるんですけど、子供に鉄剤を、これはいいか悪いかは別として、私はその鉄剤というサプリメントを子供に飲ませてるんですけど、今までだらだらしてたのが朝起きやすくなったり、あと学力が向上したんです。中学生まではそこそこだったんですけど、高校生になったらそれこそ上から１番、２番ぐらいを取れるようになって、そうなると今度は自分ができると思うので、自己肯定感も上がって、全てが結局栄養バランスによって変わるんだなというのをこの四、五年ですごく感じているので、栄養士さんがどういった勉強をされるのかとかそういうことがちょっと分からないんですけど、そういうことも視野に入れて指導をしてもらえたらいいのかな、食べるものとかの種類です、そういうものを指導してもらえたらいいのかなと思います。

○宮本教育長　私、校長をしてるときに、ここに小学校95％が毎日朝食を食べてるって言ってるんですけど、子供に時々聞いてたんです。今日、朝は何食べたというたら、そしたらラーメンじゃと言うんです。朝からラーメンって、コメントのしようがないんですけども。あと、菓子パンです。それから、スナック菓子という子もいましたし、ジュースを飲んできたっていう子もいますし、これもしかしたら朝食を毎日食べているこの95％の子も、パンだけしか食べてないかもしれないんです。ですから、今の村上節子委員さんがおっしゃったように、学校で集中して落ち着いて勉強しようと思ったら、やっぱりバランスのいい食事っていうのはすごく大切で、多分偏ったらいらいらして集中して考えることが難しくなるんじゃないかと思うんです。

だから、やっぱりそういったバランスのいい食事が大切なんだということを、さっきおっしゃった給食の試食会なんかでもたくさんの方に来ていただいて、給食を食べるだけじゃなくて朝御飯はどういうものを作って食べると子供

たちにとって成長にいいのかとかという啓発をしたりとか、やっぱり折に触れてそういった活動を今後しっかりやっていく必要があるのかなというふうに思います。

○平谷市長　もう鉛筆を持って勉強して知識を詰め込むというのは置いといて、それより先にまず健康な子供を育てようというみたいな話で、やっぱり食は大切だみたいなんが。

それと、もう一つ印象的なのは、昔向東で農協の女性部の人が料理教室をして子供たちに食べさすという仕方をしよって、何年か前になるんじゃけど、雑煮を食べたことがない子がいっぱいおるんよ。もう多分、今雑煮を食べてない子はもっと増えとると思うで。ほで、それを食べたことがないんじゃけど、雑煮を今の農協の女性部の人がつくったときに、今のだしを食べたときに、こんなにおいしいのを食べたことがない、生まれてきてよかったいうて子供が言うたんよ。ほんまか言うたら、生まれてきてよかった、おいしいというて、それがもう印象的だったね。

ただ、もう一度今の元気な子供という話の基本は食だみたいな話で、ちょうど学校給食を令和７年には因島地区がいって、令和８年で全校の中学生がいくというのも踏まえて、少し来年６、７とかを含めながら食のイメージをどうするかというのを一緒に考えて、ほいから尾道はいりこの取扱いは日本一なんです。昆布は、今のように北海道からのいろんな昆布の加工品は、昆布の加工も尾道の食品加工企業が多いんです。まるじょうさんも含めたらカツオをやってるので、だしの３要素は皆尾道にあるというんで、そのようなんも巻き込んで、やっぱり食というていうのをひとつ教育委員会の、当然子供たちの健康なんだけど、就学前も含めて何かみんなで一緒にやったほうがいいような気がするよね。多分、今初めにやっとかんと、多分これからはもうゲームと一緒になってから、もう食は食べるけど孤食になるというんか、ほでそれをやりながらパン食べて、それできれいに食べたみたいに終わって、みんなで家族みんなが集まっていただきますというて、もう何か食べようるときにはテレビを見ようるし、そんな感じのことがあるから、そういう部分を知った上でみんなで保護者の人とか地域の人と協力してやっていくというのがあってもいいかなと。

これから栄養教諭さんが非常に重要になるんじゃないですか。多分、いりこにしても、今日もフジオナッツさんが来とって、今のようにいりことナッツを入れるとか、そういうようなことも皆尾道の事業者でやってるような話なんで、いりこにピーナツを入れてこざかなくんとかというて、何かその食材をテーマにしながら何か食卓文化を変えようとか、そういうのをやっていくという

のは何か一番大切なような気がするけど。

それに、食後のデザートでかんきつやろ。ほで、尾道の場合は４月ぐらいのイチゴから始まって、イチゴ、桃、イチジク、ほいからスイカ、全部尾道で採れるんよね。その間にブドウも入ってくるんで、それらの食材の宝庫なんじゃというていうことも合わせて子供らに教えてもらえば、やっぱり尾道はええまちよとこうなる。それを上手に今の栄養士さんなりにやってもらったらいいんじゃないんかと思うんですけど、新苗さん、いかがでしょうか。美術館長さん。

○新苗美術館長　美術館ではなくて、私が今までスローフードの関わり……。

○平谷市長　農林水産でもいい。

○新苗美術館長　スローフードのほうでは尾道の食材を、例えばワケギとかそういったもので、ＰＴＣとか、あと学校で土曜日に栄養士の先生とやるようなときには、尾道産の食材の提供、これは今も枠があってやっていますので、そういったのを現場にどんどん情報提供して使っていただいたり、やはりＪＡのいろんなワケギ部会とかイチジク部会のお母さんたちに協力していただいて、そういう一緒につくる、子供たちとっていうような活動も実際やっておりますので、もっともっと連携して進めていったらいいのかなと思いました。

あと、だしに関しては、日本遺産で認定されている北前船、この関連でやはり煮干魚類とか、それから海藻類の加工が尾道では非常に盛んです。私も文化財の愛護少年団の活動の中で、やはりだしの普及をやったり、だしを使ってカレーを作って食べたりとか、いろんな課でちょっとばらばらと実際にそういった食育、尾道の食材を使った活動っていうのはありますので、その辺がもうちょっとうまく連携しながらやっていくと、もっともっと歴史的な背景が今の食につながってるっていうようなところにもつなげられていいのかなと思いました。すみません、美術館とは全然ずれてるんですが、ぜひうまく活用できればと思いました。

○村上正則委員　その話の続きなんですけども、尾道の地場産物の使用率です。金額ベースでもカロリーベースでもいいんですけども、給食でどの程度使われてるのか、今後増やしていく予定、ぜひ増やして、本当は100％全部尾道産というんがすばらしいんですけども、その辺はどんなんでしょうか。

○末國庶務課長　市長、庶務課長。学校給食における地場産品の使用率なんですけれども、今現在目標を立てて、食育推進計画というものを立てまして、その中で県内産を産地目標30％、それから尾道市内産を15％という目標を立ててやってます。

ただ、現在のところ令和４年度の実績でいいますと、尾道市内産が9.4％、それから県内産が26.3％という状況でございます。これはちょっと夢のない話もいろいろあるんですけれども、まず給食費がかなり限られてるというところの中で、やはり優先順位はもちろん尾道市内産のものをまず使いたい、その次が県内産のものを使いたい、その後が国産のもので対応したいというような形で順に対応してはいっておるんですけれども、市内産のものっていうのはどうしても値段が張ったり数がそろわなかったりというような部分がございますので、そういった部分でちょっとなかなか増えていってないというところがございます。

あと、近年はコロナの関係がございまして、学校が休校になることが非常に多うございましたんで、その場合には市内産をお願いしてますとキャンセルが利かないというところがございます。なので、どうしても市内産を避けて対応せざるを得ないような状況もございましたので、今このような結果になっているというような状況でございます。

ただ、当然のことながらできるだけそういった市内の地場のものを使っていきたいというようなことは考えておりますので、今のところはお米に関しては御調のみつぎ米を100％使用させていただいてたりというようなことはございますし、折々に市内の産品を取り入れて給食を提供させていただいてるんですけれども、なかなかそこはもう少しちょっといろんな尾道の代表的な産品を取り入れていくには、やはりちょっと今の給食費の中ではなかなか限界があるなというようなところでございます。

すみません、以上でございます。

○村上正則委員　例えば、今日は尾道の日とかというのを設定して、子供たちに意識づけとして全部が尾道産のものを提供できるとかということは不可能ですか、どんなでしょう。月に一回でも何かそういうのがあれば子供たちも意識がそちらのほうへ向くんじゃないんかなと思うんですけども。

○豊田委員　今の村上正則委員さんのとつながりがあるんですが、やっぱり食文化とか食教育というのを子供たちの総合的な学習と結びつけて、子供たちが主体的に地場産業はどんなものがあるかとか、そういったものを調べたり、それから今頃はビデオで連絡できますよね、学校同士でオンラインで。例えば先ほどのワケギは向島で採れますよ、岩子島で採れますよ、私たちはこのような研究してますよということと、それから瀬戸田のほうのレモンでもいいと思うんですけど、そういうものを取り上げてオンラインで交流したりして、尾道の日というのを決めてしてもいいと思うんですけど、この食文化とか食育という

のを子供たちが総合学習の中でいろいろに調べたり、それから調査をしたり、それから聞き取りをしたり、いろいろやっていくといいんじゃないかなと思うんです。もっと動きのある、子供たちが動いていって食を考えるというふうな形に何かできないかなというような気もいたしますが。

以上です。

○平谷市長　食材を、米が何とか御調産じゃとか、それはいいんじゃけど、要するにだしのもとはどこを使ようるんな。だし。

○末國庶務課長　ちょっとそこまでは把握しておりません。

○平谷市長　基本的に、だしのいりことか、いりこだしとかをいりこを取ってだしを取りょうるんじゃなしに、だしのもとを使ようるんか。昆布を取って昆布だしをしようるとか、カツオを使ってだしをしょうるというて、給食じゃそのようにしょうるまあ。だしのもとを使うんだったら、値段のことは関係なしに尾道で使ようるだしのもとを使うとか。もとになってるのがそれになりゃあええとか。多分、ワケギを給食なんかじゃったら、そりゃあ生産者は給食へ出すというたら料金が合わん。だから、多分レモンを使う思うても、瀬戸田のレモンを使うというたらもうそりゃ値段が合わんわの。だけど、食材の宝庫だという話をするときに、いや高いんだけどここの尾道はそうなんだというようなことをどっかで言ってやることはできると思うんじゃけど。

米は御調産でもええんじゃけど、ほいじゃけだしはどこなんかという話。ほいで、例えば今のように給食になったときに雑煮はメニューの中に入るんかとか。なかなか難しいじゃろうね。そんなことも含めていろいろ考えてみるというのはいいと思うんじゃけど。槙原さん、栄養のバランスとかなんとかというのは取るよな。そんな考えんや。

○槙原因島瀬戸田地域教育課長　食育、本当に大切だと思ってて、私は小さいときからやっぱり親がつくって、親は朝食は米とみそ汁で育ったので、実際自分が子育てをするようになってからは、そういったことがちょっと正直できてなくて、今いろいろなお話を聞いてて反省するとこがすごいたくさんあるんですけれども、自分自身やはり余裕がなかなかないというのが実際のところで、経済的なところもやはりいろいろ御家庭によってはあると思いますし、私で言えばやはり十分な余裕が、今もないですけども、子育てをするに当たってもやはりもう本当に育てるんが精いっぱいだったなと、ちょっと食育とかそういったところまで十分気持ちが回ってなかったなっていうのは、今皆さんのお話を聞きながら思っておりますし、それではいけないなっていうところです、はい。と思ってます。

○平谷市長　貴重な意見ありがとうございました。

やっぱり子育てしてるときに追われて時間がないんでというていうのは、ついついというのも当然ありますから、逆に昔は要するにみそ汁の中にいろんなものを入れて栄養をそこで取ってもらおうとかというような形で具がたくさんであったというような話で、大きくなるまでに例えばみそ汁で豆腐とワカメだけのみそ汁とか、揚げと何とかというよりも、何か分からんけど考えてみたら大根から何からもういろんなもんが皆ごった煮で入っとったよのうというのが昔のみそ汁じゃったと思うんよ。最近は、お澄ましとかなんとかスマートになってきよるんじゃけど、逆にそういうのんで子供に栄養をつけようというようなことがあったような。昔は、味の素をかけたら賢うなるというて、ホウレンソウに味の素をいっぱいかけてから賢うなるとかと言われながらというのが昔はあったと思うんですけど、やっぱり食べ物というていうのは、やっぱり忙しいとかいろいろあるんだけど、やっぱり一つテーマとして一緒に取り組んでいく大切なテーマだと思うので、逆に地域を挙げて親のＰＴＡも含めて、関係者みんな集めて、尾道は本当に食材の宝庫だと思うので、それを子供たちにも学んでもらいながら、元気な子供たちを育てていくと。

尾道高校のラグビー部で見てる中で、こんなにもアレルギーの子も多いんよね。食材アレルギーの子も。それを毎日アレルギーの子たちはメニューは別に食堂の人たちが別メニューで出されて感心するんだけど、多分給食の中でも子供によってはアレルギーの子とかたくさんあると思うんで、いろんな形でそういった人と力を合わせながら、元気な子供たちということで、庶務課長さん、お金のことも当然あると思いますけど、やっぱりしっかりと一緒になってからＰＲできるというふうな形で取組をさせてもらったらと思いますんで、ひとつよろしくお願いいたします。だしのもとは全部尾道産で。地域でやられてるとこがあると思うので。

ほいじゃあ、今のような形で、一つの項目は力を合わせて元気な子供たちのもとということで、食事というのをテーマにしながら。それから、令和８年度には中学校の完全給食ということがあるので、それを目指して令和７年度は因島が全域ということで順次進めていくので、食を大切だということを取り組んでいけたらというように思います。

ほいじゃあ、次にテーマとしてもう一つありました部活動の地域移行ということにつきまして、ちょっと説明をしていただけますか。

○三浦学校経営企画課長　それでは、部活動の地域移行について説明をいたします。

休日部活動の地域移行につきましては、令和４年12月にスポーツ庁、文化庁から学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン――今日の資料に添付しておりますけども――というガイドラインが示され、本市立中学校においても、このガイドラインを踏まえ取組を進めていくこととしております。

今日、資料を一部準備しております。休日の部活動の地域移行についてと書いてある資料なんですが、この縦１、国の動向というところを御覧ください。

ガイドラインでは、少子化が進む中、将来にわたり生徒がスポーツ、文化芸術活動に親しむことができる機会を確保するため、速やかに部活動改革に取り組む必要があること。そして、部活動の地域移行に当たっては、地域の子供たちは学校を含めた地域で育てるという意識の下、生徒の望ましい成長を保障できるよう、地域の持続可能で多様な環境を一体的に整備、地域の実情に応じ生徒のスポーツ文化活動の最適化を図り、体験格差を解消することが重要などとしております。

また、ガイドラインは、これらのことからまずは休日における地域の環境の整備を着実に推進すること、市区町村が運営団体となる体制や地域の多様な運営団体が取り組む体制など、段階的な体制の整備を進めること、令和５年度から令和７年度までの３年間を改革推進期間として地域連携、地域移行に取り組みつつ、地域の実情に応じて可能な限りの早期の実現を目指すこととしております。

次に、国の動向を受けての本市の取組についてですが、資料の縦２を御覧ください。

今年度は、まず尾道市立中学校における部活動の在り方に関する検討委員会設置要綱を改正し、これまで中学校長会長、中学校体育連盟会長、教育委員会事務局職員から成る検討委員会を拡大し、学識経験者、保護者代表、体育協会代表、文化協会代表、競技団体代表を加え、本市の実態に応じた地域移行の具体的な在り方について検討を行っているところです。

また、今年度は生徒のニーズを把握するとともに、活動状況等を踏まえ、今後の部活動の在り方を検討していく趣旨で、尾道市おのにゃん文化・スポーツチャレンジ教室を開催しております。

活動種目は、令和４年度に実施したアンケート調査で一定の参加希望がありましたブレイクダンス、バドミントン、科学研究、計25人が申込み、一覧にありますとおり開催いたしました。

講座に参加した生徒からは、バドミントン講座では学校の部活動にはない活

動でよい経験になった、ほかの学校の生徒と仲よくなれた、ダンス講座では運動するよい機会になった、科学研究講座ではたくさん質問ができてよかったといった声が寄せられました。

ただし、アンケートでの参加希望よりも実際に参加した生徒は少なく、休日に学校の部活動をしている実態を考慮せず開催したことが課題であると捉えております。

今後についてですが、検討委員会では休日部活動の地域移行の環境をどう構築していくか、運営団体や実施主体、指導者の確保、活動場所、保護者負担の軽減、保険の在り方等につきまして具体的な方向を検討してまいります。

また、中学生対象のアンケートを再度行うことで生徒のニーズを把握し、来年度の尾道市おのにゃん文化・スポーツチャレンジ教室の内容や開催方法等について検討をしてまいります。

以上です。

○平谷市長　ありがとうございました。

なかなか難しい状況なんですけど、福岡に東福岡という、今のサッカーもラグビーも含めて、もう全国の強豪校があるんですけど、それが今部活動をされようる先生方が土日やってしまうとそれの移行にならないというんで、クラブに関わるそれぞれのコーチを別に雇用したい。だから、競技力を落としたくないというのもあるので、その関係者も含めて今のように指導できるスタッフをそろえたみたいな話ですよね。

多分、それは尾道高校のやってる今の部活動を指導してる先生方が、今のままで土日を移行すると、要するに働き方改革でそれは難しいと。だったら、それに見合うスタッフを新たに雇用せにゃいけんと、土日、土日ごとに。そうすると、どうしても費用を伴うということになるし、そういう問題が出てくるんじゃけど、今は方向性として金銭的なバックアップは何もないよね。そういう中で、地域移行、地域移行ってやるっていうのがあるんで、その辺は少し県なら県のほうにきちっとそういった具体的な支援があってやるというてあるんじゃけど、なかなかお金をつけてやろうというとこにならんのよね、教育長さん。

○宮本教育長　そうなんですけど、今、国も、令和５年度から７年度に積極的にやろうって最初は言ってたんです。ところが、やっぱり過疎地域などは指導者がなかなか確保できないということで、地域差が物すごくあるんです。尾道なんかは確保がある程度つきやすい歴史的背景とか文化的背景がある町だと思うんですけど、広島県でも県北のほうは、もう人がいないんじゃと。だから、教

育長会なんかでも県に何とかならんのんかというて人材バンクの要請だったり、あるいはもう部活動を中心にした教員採用をしてくれんかと。極端な話、３時ぐらいから勤務開始で、多少授業は持つけど、あとは放課後のクラブを中心に指導できるように雇うてくれんかとか、そんなことまで言われる教育長もいらっしゃったり、だから人の確保がすごく難しいんで、今そういう方向性がなかなか見いだせないような状況。

あと、報酬の問題も、国も今んとこまだ何も言ってきてないんで、なかなか県独自で出すというのも難しい状況で、ちょっと進め方に今方向性がなかなか見いだせんような、そんな状態です。

○平谷市長　焦らずに様子を見ながらというように、今のように連携をしながらちょっとやっていく必要があるんだろうというふうには思いますよね。そうしないと、多分土曜日、日曜日に今やられてる学校のクラブ指導の人に土日をやるんですよみたいな話で、働き方改革ってキーワードがちょっと違ってくるんで、土曜日、日曜日をじゃあ子供たちが活動できる人たちの指導者とか、場所をどうするかという課題がどうしても残ってくるという。その辺がなかなか難しくて、東福岡なんかは全国で優勝するというようなことで子供たちが集まってるのに、土日を今指導する人たちと同レベルの人たちが指導するんじゃったら納得できるんじゃけど、そこは指導しませんという話はちょっと難しいので、高等学校サイドとして雇用をしたという。

そうすると、多分私立の潤沢な学校とそうでない学校の格差がまたついてくるという。だから、県立の学校とかそんなことできるようなお金がないんで、余計私学へ私学へという思考が向いてくる可能性があるんで、ちょっとその辺は早期に何か対応を考えんと、それじゃのうても今のように授業料が私学も無料という話になってくるとなかなか難しい環境が周りにあるなというのもあるんで、ちょっと連携をさせてもらいながらということだと思いますよね。

一方、進歩としては今のように子供たちが活動ができる環境整備ということで、びんご運動公園は随時これから、1994年のアジア大会でできて大体来年で30年がくるんで、施設を含めて老朽というていう話になってるんで、そこを核にして県のほうから今のように整備をすると。もともとの頭へ来たスタートは、広島県がサッカースタジアムで32億円出すという。全体としたら、昨日も知事も一緒だったんですけど、270億円ぐらい係った経費で、そのうち30億円、30億円を１対１でそれぞれ出したらできた話なんでしょう。

周辺には、にぎわい創出というキーワードだけど、多分その地域移行とか教育的な課題がないということをきっかけに今働きかけをして、今のびんご運動

公園という話が動いてるんで、これから５年度、６年度、７年度、３年間に関わりながら計画的に環境整備に入っていくという。そしたら、今のように御調町はソフトボール球場を中心として、それから真ん中がびんご運動公園と東尾道、向島と因島はそれぞれ都市公園になってる。それの環境を整備しながらやっていくという。特に因島なんかはソフトテニスはクラブチームで指導されてる人たちがいるんで強いんで、そういう指導者の人がいる競技はその人たちと連携はできるんですけど、あとはサッカーだったりラグビーだったり、ソフトボールは今のうちの山下君というて消防の山下君が久保中でいわゆるクラブチームでやるという話で、幾らかそういったような手だてを連携しながらちょっと整理をしていく必要があるんじゃろうけど、文化系はもう全然ないよね、今。

広島なんかへ行くと、例えば吹奏楽というて個別に楽器の指導者がおるんです。そこへ行って勉強したりするというのがあるけど、吹奏楽もそれぞれの楽器を指導してくれてるような人がおればそこが受皿になるんじゃけど、どう。

○村上節子委員　今、吹奏楽というか、そういう弦楽器だったりとかでいうと、しまなみジュニアオーケストラって尾道で活動してる、あれは違うんですか。

○平谷市長　あれはあれでええんじゃけど、弦の話になるとどうしても金についてきて話になるんで、例えば尾道市の市吹の吹奏楽をやられてる人たちが週末とか、ええよ子供をよこしんさいやって、面倒見ちゃるよというていうようなとこまではいってない。どうしても、やっぱりお金を払っていくような感じですよね。

○村上節子委員　今ちょっとふと思ったんですけど、学童ではなくて放課後クラブっていうんですか、児童の。各学校に必ずあるわけではないですけど、そこにちょっと一時期携わってたことがあって、退職された方でたけてる技術を持ってる人たちが、ある曜日には音楽活動をしましょうとか、ある曜日には昔活動をしましょうとかというのをしてたところに行ってたことがあったんですけど、そういう人たちを巻き込んで部活動に近いようなことをするというのは難しいんですか。

○宮本教育長　今もう検討委員会の中にしまなみスポーツクラブとかああいった総合型スポーツクラブの方が入ってきてくださってるんですけど、皆さん言われるのは、高齢化しているのでとてもやっぱり子供、中学生を相手にいろんなことをするのがやっぱり難しいというのと、今中学校の部活動の中にあるものは基本的にそういった子供遊びとかしまなみスポーツクラブとかそういったスポーツクラブに同じものが、重なるものがまずないんです。

だから、別に競技力を向上するためだけが地域移行じゃないので、様々な選択肢を用意する上では大切だと思うんですけど、子供のニーズと受け手の側の指導してくださる側のそれが一致すればそういったことも可能だと思いますけど、なかなかやっぱり高齢化してるっていうところが、必ずそういった方々からちょっと口に出て、なかなか前向きな意見をいただきにくいというような一面はやっぱりあることはあるんです。

○平谷市長　子供らがグラウンドゴルフをするのはいいんよね。グラウンドゴルフ、大会があるのへ子供のチームで出ていったりするのはいいんだけど、それが例えば今の毎週土日にグラウンドゴルフへ行く子ばっかりじゃないというような話で、受皿全体をどうするかというのがあるんで、そこは非常にハードルが高くて、逆に今のように東福岡のように全国レベルで全国優勝を狙ようるのに、先生が働き方改革で校長は命じられんじゃないですか、土日もしろというて。命じられんのんだけど、この子らにしてみたら全国レベルでとにかく勝負しに行きたいという話になるんで、それに見合う要するに指導者を別個雇用で。別個雇用できる私学は圧倒的にいいけど、ほんなら県立の高校でそういうようなことが予算でできるんかというたら、それはなかなか、奥田委員さん、なかなかだよね。

そうすると、どうしても私学と公立との差が出てくるというていうのも一つの中に出てきてるという状況なんです。だから、全体の今の中学生の意向というたら、尾道はまだそがいな私学と云々というのはまだないんで、その全体としてクラブができたり、週末楽しく体づくりできる環境をどうするかというのが今一つ課題なんだけど、金銭的な云々というのはない中でするんで、それは何とかこれから連携してやらないといけんなという。

○奥田委員　これ、なかなか制度としてしっかり固まってないから、議論をしても難しいところもございますよね。一つは感じたのは、これは休日の部活動の地域移行という限定ですから、土曜、日曜のみということですよね。

ですから、ふだんの例えば中学校などの部活動についてはどうなっていくのか、従来どおりのイメージなんでしょうけど、そういうあるいは土日に指導者がおられたといっても、それ報酬の問題と、あとは何か事故があったときにどういうふうに責任を取れるのかという、そういう問題もあって、全体の枠組みが、制度がきれいにいかない限り、なかなか難しいところがありますね、これは。

ただ、そうはいっても大きな動きになるから準備はしていかなければいけないという部分と、詰めてすぐ具体的にやるというところへなかなか踏み込めな

いというところと、両方の難しさがございますね。

○平谷市長　これは今のように競技力を高めていくための休日部活動と、そうじゃなくていろんなスポーツを体験できる休日部活動って２つに分かれるよなと。井上生涯学習課長がいい案を持っておられるということなん。

○井上生涯学習課長　御指名いただきましたんで。

もうまさに皆様が今お話をされたのが課題かなとは思ってます。私自身は、いろいろ課題はあるんですけれども、大きくは３つ、場所の問題と指導者の問題、それと継続性の問題なんですけれども、場所の問題は、この前おのにゃんでバドミントンを４回やったんですけども、なかなかそのバドミントンをやる場所がないということで、前半２回は向島運動公園、後半２回は御調の体育館でやったんですけれども、やはり終わった後にその子供が、当然多分親が送り迎えしてたんだろうと思うんですけど、ずっと待ってるんです。やっぱり親のほうの感覚からすると、非常に送迎は負担だろうなっていうのがちょっとまず１点、場所の問題ではそういうふうに感じております。

指導者の問題は、先ほどからおっしゃられてるとおり、これはレベル感が中学生のどういったところまでたどり着きたいかということで、指導者の人のレベルというか、それも１人じゃなくてやっぱり競技力向上のニーズもあるだろうし、単純に楽しみたいというニーズもあるんで、その辺でそれぞれの指導者を、言い方はあれなんですけど、用意するというか、そういったところが難しいかなと思っております。

もう一つは、継続性。これも結局は指導者の問題になってくるんですけれども、１回きりのこういったお試しであれば、それは何とかできると思うんです。これを通年、さらに将来的にずっとやっていくためには、やはり教える側としてもある程度の報酬がないと、ちょっと継続性は難しいんじゃないかなっていうような思いはあります。

今、想定されるのが、例えば地域総合型スポーツクラブであるとか、体協の各種スポーツ団体、こういったところが受皿になるかなというふうな想定はちょっと最初の頃は思ってたんですけれども、地域総合型については、やはり指導者の高齢化が多くて、なかなかニーズに合ったものを教えるというのは非常に難しいんじゃないんかなというのを今私自身感じております。

もう一つ、体協の加盟団体、これ今28団体ぐらいあるんですけども、やはりこういった団体も指導者が充実しているかどうかっていうのは、まだ聞いてみないと分からないんですが、どちらかといえばプレーヤーというか、皆様楽しみたいということでずっと継続をされてる方が多いんじゃないかなという意味

では、指導者を育成していくっていうのが非常に大きな課題ではないかなと私自身は感じているところでございます。

以上です。

○平谷市長　なかなか難しいんですけど、今のまた尾道高校のラグビー部の話になるんが、今アカデミーという要するに学校のクラブでなくて、例えば竹原とか福山とか広島でラグビーを親しんでる子たちを、毎月１回ぐらい要するにクラブ指導じゃなくてラグビーを、その練習を楽しみにくるという、それはある意味地域移行の一つのスタイルかなと。でも、指導する側はずっと同じなんよね。じゃけえ、なかなかこれらに今の学校の校長が命じることが難しいと。自分たちは、どうもそんなものは要りませんので、自分たちは普及啓発ができりゃあいいんだという形で指導はしてくれるんじゃろうけど、それがずっと、さっきあったように、けがした場合はどうするかとか、そういう課題がどうしてもついてくるんで、そこはひとつランニングしながら解決するような先行型でやってみるのも一つかなという。

例えば、御調高校のソフトボール部が今監督、日野君がずっとやりょうるけど、これも要するに来とる選手からいうたらもう全国優勝するためにやりょうるんで、土曜日、日曜日とかというのは遠征に行ったりするわね、どんどん。そりゃあもういけんのんですよというていうわけにいかんのんで、それじゃあその日野君と同じような指導者が同レベルというか、選手が納得する指導者が、ほいじゃおるかという話になると、その納得するような指導者を東福岡は雇うてくれるんよ。そのあたりがちょっと課題になるんじゃけど、先行しながらやるというていうことも一つあるかなと。

前は、教育委員会のほうに今の高等学校でいろんなスポーツタウンをやるんに高校でリードをしてやってる、例えば野球なんかじゃったら今の尾道商業の監督でもいいし、それらもいろんな課題を持ってるじゃろうから聞きながら、一応スポーツ振興の委嘱して、共に何かやるということを考えたらどうだろうかという話はしよったんですけど、それがなかなか今のように９月議会で他の議論があって、なかなかずれ込んだんだけど、少しそんなんもあってもいいかなというようには思うんです。

そうしないと、多分解消していく方向にならんのんです。今の国と県の動きを見よっても、前に進むんじゃなくてみんな市町がストレスをためてるという。ほいで、教育委員会はもともとスポーツ振興課は県の教育委員会にいたんじゃけど、地域政策局のほうへ行ってしまって、学校のそういった課題に対応する仕組みになってないんじゃろう。

○宮本教育長　そうなんです、なってないんです。

○平谷市長　ほで、そこへ前の御調高校の監督しよった小川君がそこに行ってるんで、声かけるけえ一応来いと。声かけたら来て、いろいろ尾道でそういった高等学校でやりょうる先生らと一緒に何か課題を見つけていけたり、何かこうやって会議したりするときに来てくれるかというたら、いつでも言うてくださいという話で。ちょっと現場の声を聞きながらしないと難しいか分からんよね。

そのあたりは、一応まだ市のほうと教育委員会で話をしながら、ちょっと連携をさせてもらいながら前へ向いて階段を一歩ずつ上がって一遍に行くところまでいかないんで、市としては逆に向島の運動公園を、今のように順番で一番最初に天然芝にしたのは因島なんです、サッカーサイトが。

これは、ＦＣ今治の岡田監督がおられて、コロナでできなくなったんですけど、いわゆる子供たちを健全に育てようと思うと、やっぱりスポーツで集団でやりながら交流の輪を広げるのが大切だというんで、ＢＡＲＩ　ＣＵＰというのをやるんです。海外からチームを呼んできて。それがあるので、逆に言うと天然芝でないと国際試合とかというたらできない。それで、そこを最初にやって、その後瀬戸田をやったんです。その後、今東尾道の今のように人工芝をして、今びんごをやってて、あと向島が残ってるんで、これをどうするかというのが次の課題になってくるんで、そうすれば全体としたら岡田監督もＦＣ今治高校の校長になったんよ。今、ＦＣ今治があるんで、サッカーは今治東高校が愛媛県で優勝して全国大会に行くようになった。それを尾道側の姉妹都市で、しまなみ都市、尾道、今治で沿線全体が今のようにスポーツができるような環境を整備して取組をするのが一つの方向だなと思って、ＦＣ今治とも連携はできるという。

そういうのも視野に入れながら、環境を整備しながら、あとは仕組みづくりをどうするかということになると思うんで、もともとサッカーは因島が盛んだった。だから、今の議員の宮地君らが皆そういうように指導を受けて因島なんかが強かった。そうですよね、村上さん。

○村上正則委員　よく知らないんですけど、多分そうだと思います。

○平谷市長　今の万田発酵があるところはグラウンドだったんじゃ。あっこでサッカーの試合を私らしよったん、子供を連れて。じゃけ、島嶼部の因島とか瀬戸田が強かったんよね。その子たちが多くなっとるんで、フットサルとか何かでやりたいというて雰囲気はあるんで。

そういう意味では、少し課題にさせてもらいながら取組をさせてもらいたい

と思うんで、片っ方はあと文化系だ何とかという話になると、どうしても吹奏楽、どうにかならんかな。

○宮本教育長　希望は何が多かったですか。

○三浦学校経営企画課長　昨年末に中学生に取ったアンケートで、今後そういう地域部活動になったときにやりたいというもの、やはり吹奏楽も30名程度、市内でやってみたいという者はおりました。いろんな種目で希望を聞いてるんですが、スポーツ系と同じぐらい、やはり文化系の希望者が多かったこと。今回、おのにゃん文化・スポーツチャレンジ教室をやった場合も、バドミントンとダンス、科学研究をやりましたけども、科学研究が希望者が多かったんです。希望した者のうち参加を実際にした者も多かったということで、文化的な活動に対するニーズもかなり潜在的にあるんじゃないかなと思っております。

○平谷市長　多分、そっちも多いと思うよね。それは多分、もっと中山間と指導者でいうたら格差が出るか分からん。もういつもいつも神楽ばあできんじゃろう。

○宮本教育長　その点、尾道は絵を描きたいとか、お茶をしたいとか、書道もありますし、いろんな文化的な団体の御協力が得られれば、選択肢はたくさん用意できる、そういう強みがあるんじゃないかなと思います。

○村上正則委員　絵とかというんだったら、尾道大学の学生さんとか大学院生の方を講師に招いて、そこでクラブというか、そういうのは無理なんですか、どんなんでしょう。

○平谷市長　皆でもアルバイト料が要るよね。

○村上正則委員　当然。だから、お金のある家は多分できると思うんですけども、例えば瀬戸田から絵を習いたいということで、学校じゃないよと、尾大で開講しますよということになると、送り迎えとかそういった問題とか、イメージとしては土日の塾というような感じなんだろうから、どうしてもそこら辺が費用が要るんじゃないんかなと思いますけど。

○平谷市長　高等学校の先生方が、要するに今の兼職、兼業化というような形で土日に何かするというていうのは、今は県教委としてはどう思よんじゃろうか。

○三浦学校経営企画課長　これは県のほうとちょっと相談をさせていただいたんですけども、基本的に兼職、兼業はできる考え方です。ただ、やはり働き方改革ということもありまして、兼職、兼業で働いた時間も加えてやっぱり80時間を超えることはできないという回答ですので、なかなか現実的に高等学校の先生が地域クラブ活動を担うということは難しいのではないかというふうな御意

見をいただいております。

○平谷市長　片っ方は、国体で少年男子、点数が低いじゃのことは言われんわのう、ほんなら。なかなかジレンマがそこにあるじゃろうね。

ちょっといろんな形でいろんなケースのバリエーションを想定しながらというので、多分今のように毎朝、朝グラウンドへ行って野球のコーチも含めて、それから週末になったらバスケットからバレーから皆先生方も保護者も皆試合へ行くのに動いたりしょうる話を見たりして、何かこの部活動の地域移行というのは全然畑違いのことを言ようるよのうと感じるんよ。

だから、ソフトランディングができる仕組みをやっぱりつくってあげんと、指導者の人にとっても申し訳ないなあというような気持ちになるんで、ちょっと連携をさせてもらいながら取組もしましょう。

ありゃあどうする、高等学校の先生らに来てもろうて、一応メニューで相談したりするような仕組みは。

○宮本教育長　市長さんから話をいただいて、今年の９月から10月ぐらいにかけて第１回の何か集まりができたらいいねって言よったんですけど、いろんなことがありまして、今ちょっと延びてるんですけども、県教委に今いらっしゃる小川先生なんかを核にして、やっぱり意見、今後の中学校のスポーツの在り方とか部活動の在り方とかに意見を聞いていくというのは非常に大切なことだと思いますので、尾道の市内の中に高等学校で優れた指導者の方はたくさんいらっしゃいますので、そういった方も含めて、やっぱり意見を聞く場はつくりたいと思っております。ちょっと年を明けてどこで動きがつくれるかというのはあるんですが、やっていきたいとは思ってます。

○平谷市長　タイミング見て、年度が替わってもいいと思うし、方針を少し決めて今のように意見を聞くか何か委嘱して、報酬が何とかじゃなしに尾道市全体の今の高等学校を含めたスポーツの何か意見を聞くためにというようなんもあるかも分からんよね。

学校全体で、この間も今の三原の如水館高校のたまたま話になって、以前と今の如水館が甲子園へずっと行っててというような話とか、ほで、空手は空手をする子は道場が結構あって、やってる子たちは如水館へ行ってたんじゃけど、如水館が空手がなくなったりするという話になるんで、それから今のように近隣の学校というていうと、岡山が私学が物すごいんです。今のようにサッカーじゃというたら岡山学芸館、それから陸上でというても倉敷、それから今の創志、それから今、今度は作陽が倉敷へというような感じになって、もうどんどんどんどんそういったスポーツとかというのは岡山のほうが近いんで、そ

こへも行かす。ソフトテニスやったら岡山山陽だったりとかになるんで、その辺でもうやっていくと、いわゆる公立と私立の差が出てくるような環境がその中にあるんで、少しそういった高等学校でやってる人たちの声を聞いて、尾道市的にはやっぱり考えていく必要があるなと思ってるんで。

島嶼部の子供らにしてみたら、移動して出てくるというたら、地元の中でそういった指導者がおればできるけど、外へ出るというたら今度は費用の問題が出てくるんじゃ。ちょっと課題が大きいんで、またこれから調整させてもらいながらさせていただきたいというように思っています。

今、部活動の地域移行については、今の状況の課題を確認させていただいて、また新たな形で連携をしながら取組をしていきたいと思いますので、お知り置きください。今、２つのテーマで今の元気な子供たち、食ということで、部活動の地域移行ということで話をさせていただきましたが、そのほかこれだけは何か聞いてみたいとかというようなことがありましたら。

○豊田委員　先日、ＯＥＣＤの学力テストで到達度評価テストですか、それで日本が、前回は２年前ですか、読解力が13位で非常に低かったです。今回は第３位だったんですか。それから、数学リテラシーとか科学リテラシーとかというのは５位以内に入っているんですが、その中で思いましたのは、特に数学リテラシーはもっと５位よりか上に行くんじゃないかと思うんですけど、そのときにある大学の解説をされる方が新聞に書いておられた中に、数学教育が小学校も中学校も含めて、自分たちの身の回りのことであるとか生活に関わるような問題であるとか、そういったものをもうちょっと取り上げて学ばさないと、なかなか子供たちに数学が実感として生活に必要であるというふうなことを思わないんじゃないかということが書いてありました。

そこで思ったんですけれども、小学校あたりでもその生活の問題とかというふうに取り上げて、ずっと以前からやってますけれども、何かそういう視点の中に数学、算数において生活とどのように結びつくのかというふうなことを日常的に学校教育の中でやっていくことも大事かなということを思ったのと、それからもう一つは日本の学力テストの中で、尾道は平均よりか少し上だったんですか、平均か少し上だったんだろうと思うんですけど、その中でやっぱり話合い活動であったり、それから自分の意見を主張できるような、そういうふうな子供たちをつくっていかなきゃいけないんじゃないかと私は思うんです。

今日いただいた資料の中に、自己肯定感のことや、それから不登校の児童を少なくしていくための学力向上と集団づくりというふうなことが入っているんですけれども、尾道の教育の中で自分の意見をきちっと言える、言うような子

供たちをつくろうと前々からそういうことは取り上げてあるんですけど、何かもっと形として目に見えるものとして、どこの学校に行ってもそういう自分の意見を堂々と述べるような子供たちが尾道には増えているよというふうな実感が持てるような学びにならないかなというふうなことを思います。

先ほど食育の面で、食が健康で元気な子供たちを育てるということの基になるんだということを言われまして、それはそれで続けていけばいいと思うんですけれども、もう一つそういう柱として、学力の向上の中に自分を信じて自己肯定感を持ってはっきりとみんなの前で意見が言える、それを周りの子供たちが集団づくりの中で認めて、そしてそれを誰もがそういうふうなことができるんだというふうな、何か具体的にそういうふうなものを一つ掲げてやっていくといいんじゃないかなということを一つ思うんです。いかがでしょうか。

○平谷市長　なかなか難しい質問ですが、大切なことだと思うんは、集団の中で自分がどうかということで、その中で自分が集団の中で自分の考えが言えるような、また集団になってないと言えないけど、学級づくりとかそういう中のテーマだと思いますよね。また、そういったようなことはどうでしょうかというのを今度パワーポイントにされて、豊田モデルみたいな格好で校長先生方に話を、そういった場もいいんじゃないかと思うんですけど、やっぱり今までいろんな指導の仕方が、以前の私らみたいに学校の教員をやりよったときでも、根性論ばあ言よったんじゃけど、今はもう全くそういう形じゃなあっていうのが、高等学校の朝へ行ったら指導者でもう全然違うんです。

この間、ちょうど野球部が中国大会へ行くときにピッチャーを、打つというので160キロのスピードで、それで３メーターぐらい前から投げさすんですけど、ほで、選手が１人やっててもなかなか当たらないんです。監督は私の隣へおって、北須賀さんが一言も言わんから。やってるのを見て、当たらなくても黙っとるんです。言ったのは、ポイントを少し前に出して一発いいのが当たったら替われとかということだけなんです。私だったら、性根を入れて打てとかって言うんだけど、そういう言葉を言わない。それで、そのタイミングで今度は逆に言ったら、１回いいのがあったら、ほいじゃあというて替われとかというて替えてやるんじゃけど、必ずというて自主性を物すごく尊重する指導に今のどのクラブも指導者がなってて、それでその中でラグビーなんかの練習も物すごく科学的にどんどんどんどん進むんだけど、生徒同士がコミュニケーションしないと駄目だというのがあるんで、野球も同じように物すごくやるんです。

だから、これからは多分集団の中でいろんな形で自分の考えを言えるという

ていうのは大切なことだと思いますよね。なかなかそれが集団の中の雰囲気がそういう学級づくりとかでなっとればいいけど、今の豊田委員さんのことをしっかり受け止めて、あっこらへおる皆そうだと思ってますから。やっぱり今日全体を通して基本的なことが大切なんだということだと思いますよね。やっぱり教育の町尾道という話だったら、まず元気な子をつくって、それでその中で尾道の持っとる資源を十分活用して元気な子供を育てようと。

それから、部活動も含めると、逆に言うと地域移行というのはそれぞれ大きな課題があるんだけど、多分さっき如水館の話になったんじゃけど、それも三原の人に言われたんじゃけど、尾道は新聞でもスポーツで全国大会へ行くチームがあって、その活躍がすごいよのうというて。例えば、御調高校のソフトボールが国体で優勝するとか、ほかのとこに国体で優勝する記事はないんです。尾道高校の野球も新聞には出るし、逆にソフトテニスは３年連続インターハイへ行くしというような感じで、子供たちが活躍してるという部分を、それも生かしながら、意見を聞きながら部活動の地域移行ということになってて、やっぱり教育も含めて資源を大切にしながらという。

それともう一つは、先ほど指導の仕方がもう全く変わってきてて、その指導の仕方が変わっていることを学ばないと、尾道高校の野球部なんか致知というて雑誌があろう、あれを読んで木鶏会に入っとんじゃけえ。ほいで、人間としての生き方を学びょうるけえ、グラウンドへ入ったら尾道高校のラグビー部はこんにちは、こんにちはで終わるんよ。尾道高校の野球部は立ち止まって帽子を取って１人ずつおはようございます。そういうような生き方も含めて学んでたりすることもあって、指導者の意識がそうなんで、やっぱり学校も含めて指導者も含めて大切な取組をして、教育のまち尾道と言われるように力を合わせて頑張っていきましょう。よろしいでしょうか。

貴重な時間をありがとうございました。

○末國庶務課長　ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして令和５年度第１回尾道市総合教育会議を閉会いたします。

お疲れさまでございました。ありがとうございました。

午後３時８分　閉会